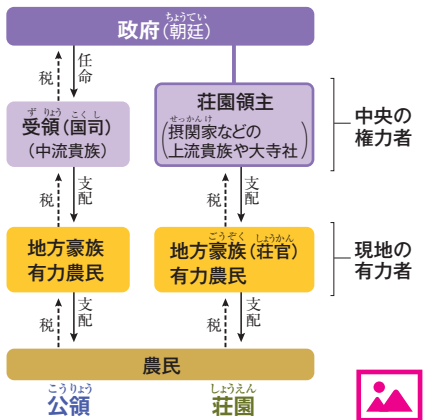


1 荘園の成立と武士の登場

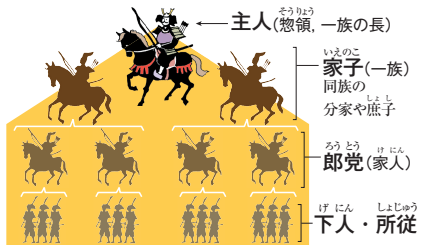
- 1 どのように荘園が全国的に広まっていったのだろうか。
- 2 源氏が東国で大きな力をにぎることができたのはなぜだろうか。

▶1 都での儀式の様子 武装して警備にあたる者も見られる。『年中行事絵巻』 田中家蔵

荘園に変わることは、その地に暮らす農民の生活にどのような変化をもたらしたのだろうか？



▲2 荘園・公領の模式図 荘園のようす



▲3 武士の家の構造

用語解説
公領 古代には公地公民が原則で、全ての土地は公の地とされたが、そのうち荘園化しなかった土地。国衛の管理下に置かれたので国衛領ともいう。荘園が最も増えた中世でも、荘園と公領の面積比はほぼ1：1であった。



荘園の形成
8世紀に成立した荘園の多くは間もなく衰退したが、10世紀になると、それにかわって、中世につながる新しい荘園が登場してきた。

地方の豪族や有力農民の一部は、国衛から一定の期間、税を免除されて山野の開発に乗り出したが、その中から、より有利な条件を求めて開発地を摂関家などの貴族や大寺社に寄進する者も現れた。こうして中央の権力者を領主(荘園領主)とあおぐ荘園が成立し、開発者自身は荘園現地の役人(荘官)となって、さらに土地の開発を進めた。

荘園の中には、荘園領主の権威を背景に、政府から税の免除(不輸)を認めてもらう荘園が次第に増え、やがて税収を確保しようとする国衛との対立が激しくなると、国衛の役人の立ち入りを認めない不入の特権を得る荘園も多くなっていった。その結果、11世紀後半には中央に送られる税が減少し、貴族の給与や大寺社の運営費を支払えなくなった政府は、そのかわりに荘園をあたえたので、荘園はますます増加した。

こうして全国土地は公領と荘園に分かれたが、いずれもその内部では、現地の有力者が開発地を拠点に地域の支配を進めていった。

地方の反乱と武士の成長
9世紀末から10世紀にかけて盗賊や海賊の活動が活発化すると、京都の中級・下級貴族のうち、特に弓矢や馬などの武芸に優れた者が国司などに任命されて鎮圧に当たった。かれらの中には任期が終わってもそのまま現地にとどまり、有力な武士(兵)として勢力を広げていく者もあった。かれらの子孫は一族や従者を率いて、たがいに戦いをくり返し、ときには国司にも反抗した。

一方、地方の豪族や有力農民たちも、自分の土地を守るために武装し始めた。かれらは地方にとどまった国司の子孫などを中心に結集し、やがて大きな武士団に成長していった。



▲4 各地の武士団

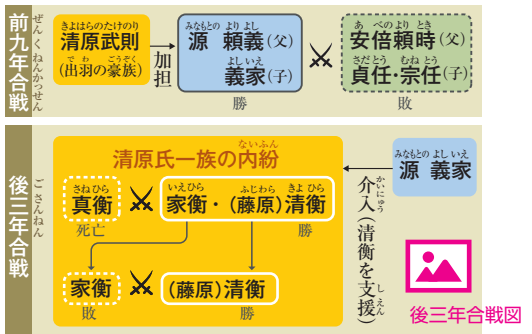
早くから東国(東日本)に住み着いた国司の子孫で、下総(茨城県)を根拠地にしていた平将門は、国司と対立して、939(天慶2)年に反乱を起こした。西国(西日本)でも同じころ、元伊予(愛媛県)の国司であった藤原純友が、瀬戸内海(瀬戸内海)の海賊を率いて反乱を起こした。これらの反乱はいずれも武士によって平定された(天慶の乱)。

この乱を通じて武士の実力を知った朝廷や貴族たちは、かれらを宮中や都の警備、貴族の身辺警護などに当たさせた。また、地方でも武士の一部は国司の下に組織され、国内の治安を守る存在となった。

源氏・平氏の進出
有力な武士は、都と地方を行き来しながら、双方に拠点を築いていった。11世紀になると、都で活動する武士の多くは、次第に天皇の血を引く源氏(清和源氏)と平氏(桓武平氏)によってしめられるようになり、地方でもかれらに従う武士が増加した。その結果、源平両氏は、多くの武士団を束ねる武家の棟梁として、広く知られるようになった。

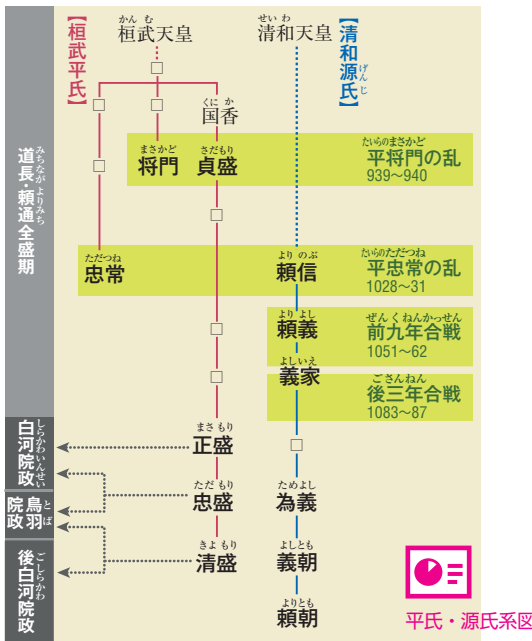
11世紀前半に上総(千葉県)で平忠常の乱が起こると、源氏はこれを鎮圧して、東国進出のきっかけをつくった。また11世紀半ばに陸奥の国司に任命された源頼義は、子の源義家とともに、現地で勢力をふるっていた豪族の安倍氏をほろぼした(前九年合戦)。さらに義家は、安倍氏にかわって勢力をのばした清原一族の争いに介入し、これを制圧した(後三年合戦)。こののち東北地方では、義家の支援を受けた清原(藤原)清衡とその子孫(奥州藤原氏)が、北方との交易や金・馬などの産物によって大いに栄えた。その根拠地であった陸奥の平泉(岩手県)には、中尊寺金色堂に代表されるはなやかな仏教文化が根付いた。

東国に進出した源氏に対して、平氏は12世紀初めごろ、瀬戸内海の海賊平定で活躍するなど、主に西国に勢力を広げていった。



▲5 前九年・後三年合戦 清衡の父は藤原氏の人物だったが、前九年合戦で敗死したため、清衡は清原氏の養子となった。

二つの合戦後、東北地方で奥州藤原氏が繁栄できたのはなぜだろうか？



▲6 平氏・源氏系図

地方の武士をまとめる棟梁に求められた条件とは何だったのだろうか？

用語解説
棟梁 もともとは建物の重要な部材である棟と梁の意味だが、そこから転じて、ある集団の中で重要な地位にある人物を棟梁と呼んだ。特に武士団の指導者を指すことが多く、武家の棟梁ともいった。

ステップアップ
荘園や武士の発生により、国衛の役割はどのように変化したのだろうか。



▲1 大航海時代とヨーロッパの海外進出

▶3 香辛料 西ヨーロッパでは14世紀以来肉食が普及し、こしょうなどの需要が高まったが、その貿易はイタリア諸都市の商人に独占されていたため、非常に高価で手に入りにくかった。



2 羅針盤 中国の宋(→p.54)ですでに知られていたが、14世紀のイタリアで改良され、天文学や地理学の発達もあって、遠洋航海を可能にした。

2 大航海時代とヨーロッパの海外進出

大航海時代は、世界全体をどのように変えたのだろうか。

4 コロンブス(1451～1506)

イタリアに生まれたコロンブスは、大地は球体であるから、インドに到達するには大西洋を西に航海するのが近道だとする地理学説を正しいと考えていた。スペイン王の援助を受けたかれは、四回にわたってアメリカ大陸を探索したが、自分が到達した地がインドであると死ぬまで信じて疑わなかった。



なぜ先住民は喜んでかえっているのだろうか？

大航海時代の始まり

ヨーロッパの人々は十字軍以来、マルコ＝ポーロの旅行記『世界の記述』(『東方見聞録』)などに刺激され、アジアへのあこがれを強めていった。また、ルネサンスによる羅針盤の改良や地理学の発達は遠洋への航海を可能にした。こうして15世紀後半からヨーロッパの人々は大西洋への航海に乗り出し、大航海時代が始まった。

ポルトガルは、アフリカ南端の喜望峰にたどり着き、さらに1498年には、ヴァスコ＝ダ＝ガマが喜望峰を経由してインドに達する航路を開いた。それまでイスラーム教徒の商人の仲介で輸入されていたアジアの香辛料は、この航路を通じて直接取り引きされるようになり、ポルトガルにばく大な富をもたらした。

スペインは、西回りでコロンブスをインドに派遣しようとした。コロンブスは大西洋を西に進み、1492年にカリブ海のサンサルバドル島に到達した。これがヨーロッパの人々によるアメリカ大陸「発見」のきっかけとなった。さらにマゼランの船隊は、1522年に世界一周を成し上げた。スペインやポルトガルが航海に乗り出した目的は、金銀や香辛料を手に入れるとともに、カトリックを世界に広めることにあった。

アメリカ大陸の植民地化と世界の一体化

スペインは豊富な金銀をねらってアメリカ大陸を征服しようとし、16世紀前半にコルテスがアステカ王国を、ピサロがインカ帝国をほろぼした。こうしてスペインの植民地になった中央・南アメリカでは、銀鉱山



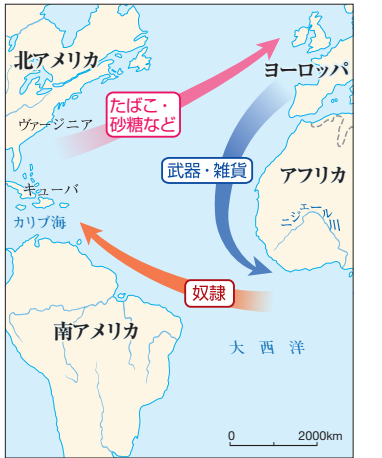
メキシコの国旗



インカの太陽祭

クスコの町並み

5 インカ帝国の遺跡 アンデス高地には15世紀にインカ帝国が成立し、現在のコロンビアからチリに至る広大な領土を支配した。インカ帝国は石づくりの建築に優れ、かんがいによる農業も行っていた。太陽を崇拝し、国王は太陽の化身とされていた。また、金銀の鉱山にめぐまれ、首都クスコにはばく大な金銀が集められた。



6 大西洋三角貿易 黒人奴隷は「黒い積み荷」、砂糖は「白い積み荷」とそれぞれ呼ばれた。



奴隷船

7 スペイン人による先住民の征服と虐殺

スペイン人が40年前から今に至るまで、そして、今日現在もなお、行い続けているのは、かつて人が見たことも、本で読んだこともなければ、話に聞いたこともない残酷きわまりない手口を新しく次々と考え出して、ひたすらインディオ(先住民)を斬りきざみ、殺害し、苦しめ、拷問し、破滅へと追いやることなのである。例えば、我々が初めてエスパニョーラ島(現在のハイチ、ドミニカ)に上陸したとき(1520年)、島には約300万のインディオが暮らしていたが、今ではわずか200人しか生き残っていないありさまである。

(ラス＝カサス『インディアスの破壊に関する簡潔な報告』)

ステップアップ

日本に初めてやってきたヨーロッパ人はどこの国の人だろうか。また、日本にはその後、ヨーロッパのどのような国の人がやって来て交流するようになるのだろうか。

